

## 公益財団法人 日本骨髄バンク 第 64 回 業務執行会議 議事録

日 時：令和元年（2019 年）11 月 11 日（月）18：00～18：55  
場 所：廣瀬第 2 ビル 地下会議室  
出 席：小寺 良尚（理事長）、加藤 俊一（副理事長）  
浅野 史郎（理事）、大久保 英彦（同）、鈴木 利治（同）、高梨 美乃子（同）、  
橋本 明子（同）、梶村 岳央（監事）  
欠 席：佐藤 敏信（副理事長）、金森 平和（理事）、高橋 聡（同）、谷口 修一（同）、  
小野 高史（監事）  
陪 席：幕内 陽介（厚生労働省 健康局難病対策課移植医療対策推進室 室長補佐）  
傍 聴 者：2 名  
事 務 局：五月女 忠雄（事務局長）、渡邊 善久（総務部長）、折原 勝己（ドナーコーディネート部長）、  
小島 勝（広報渉外部長）、小瀧 美加（移植調整部長 兼 新規事業部長）、  
小川 みどり（移植調整部 TL）、吉川 亜子（ドナーコーディネート部 指導研修 TL）、  
関 由夏（関東地区事務局地区代表）、上原 淳（総務部）、清水 志穂（総務部）  
(順不同、敬称略)

### 1. 開会

開会にあたり小寺理事長が挨拶した。

### 2. 業務執行会議の成立の可否

業務執行会議運営規則第 6 条により本業務執行会議が成立した。

### 3. 議長選出

業務執行会議運営規則第 5 条により業務執行会議の議長は理事長が当たるとされており、小寺理事長が議長に選出された。

### 4. 議事録署名人の選出

議事録を作成するための議事録署名人は、業務執行会議運営規則第 8 条により議長及び出席した副理事長が記名押印するとされており、小寺理事長と加藤副理事長がこれに当たるとされた。

### 5. 議事録確認

第 63 回業務執行会議の議事録案を全会一致で了承した。

[議 事]

### 6. 協議事項（敬称略）

#### (1) 研究申請の審査手続きに関する内規の制定について

小瀧移植調整部長 兼 新規事業部長が資料に基づき説明した。

当法人はこれまでバンク関係者の方々から様々な研究申請を受け付けてきた。審査手続きを内規でしっかり定めておきたい。申請内容は当法人倫理委員会（必要に応じ医療委員会も含む）で審議しているが、審議の範囲や手続きを明確にするために、内規を制定したい。

参考資料の倫理委員会規則第2条第1項において「本委員会は、理事会の諮問を受けて本法人の行う事業の倫理に関し審議する」となっている。倫理ということで全般にかかっているが、特に研究申請があった場合の内規ということである。

内規案は大きく2つに項目を分けており「審査にあたっての要件」と「審査について」となる。1つめの「審査にあたっての要件」は(1)申請書・研究計画書は申請者の施設内倫理審査の承認が得られていること。(2)同様の症例がある場合、文献報告例を提出すること。ドナーへの新しい話になるので(3)ドナーへの対応が準備されているか(手続きの具体的な提示、ドナーへの説明書・同意書等必要書類の準備がなされていること、ドナーが研究に同意していること)が要件とされている。採血採取施設に研究申請をお願いする場合もあるので、(4)研究施設に対して手続きの具体的な提示(施設への説明書・倫理審査書類等必要書類の準備がなされていること。ドナーへの説明と同意の確認を採血・採取施設が代行することをその施設が了承していること。その施設の倫理委員会・倫理審査の承認が得られていること)ということにしている。2つめの「審査について」である。研究申請におけるドナーへの倫理的配慮は倫理委員会で、医学的内容を含む研究は医学的妥当性は医療委員会で審査する。「その他」としては、審査結果は業務執行会議に報告するということにしている。

この手順で、参考2「過去の研究申請と研究協力」に記載している9つの研究申請に審査および協力をしてきた。この中にはドナーだけの協力依頼の申請、ドナーへの医学的な協力依頼の申請があり、倫理・医療両委員会が管理しているものがある。

判断する基準は2つある。1つめは国が定めている研究に関する指針として「厚生労働科学研究に関する指針」と「医学研究に関する指針」である。医学研究に関する指針は種類が色々あり、時代とともに変わるものだが最新指針に照らし合わせていく。これまでほとんどが「厚生労働科学研究」の対象になっている。2つめは国が研究に関する指針を定めていないもので、人を対象とする研究(人文社会科学系)で「行動科学に関する研究・調査」である。業務執行会議に以前に報告した「大規模ドナーアンケート」はこれに該当する。今後はこれらを内規に沿って実施していきたい。

以上の説明の後、意見交換が行われ、全会一致で承認された。

(主な意見)

<浅野> 今までは内規はなかったのか。

<小瀧> 担当者の手順書を作成していたが、内規という形ではなかった。

<浅野> これまで研究申請は出てきているのか。

<小瀧> 出ている。

<浅野> 従来の手順書で間に合っていたということか。

<小瀧> 本日提示した内容で実施してきた。

<浅野> これまで実施してきたものを明文化したという理解でよいか。

<小瀧> そのとおりである。

- <小寺> 内規案(3) ドナーへの対応(手続きの具体的な提示、ドナーへの説明書・同意書等必要書類の準備がなされていること、ドナーが研究に同意していること)とあるが、これは今まで実施できているのか。
- <小瀧> 実施できている。
- <小寺> これまでの研究協力に関して、ドナーへ説明しているのか。
- <小瀧> 説明している。症例が発生していない研究もあるが、ドナーへの説明書や必要書類等は研究者に全て揃えてもらっている。
- <小寺> これからの研究はそのように実施していくということで理解した。過去のデータを使う研究は、ドナーにどこでどのように説明するのか。
- <小瀧> 前回の業務執行会議で協議した「日本骨髄バンクが保有するデータに関する利用規則」でカバーしている。ドナーには「説明済み」ととらえている。
- <小寺> これまでと同様に円滑に実施するようにしてほしい。

## 7. 報告事項(敬称略)

### (1) 「骨髄バンク推進全国大会 2019 in 長野」実施報告

小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

令和元年9月21日(土)に世界骨髄バンクドナーデーに合わせて長野市のJA長野県ビルアクティーホールで開催した。骨髄バンク長野ひまわりの会が企画・準備・当日の出演等様々な場面で深くかかわり、ご協力いただいた。出席者は350名。来賓・ボランティア・職員を除いて一般から147名の参加があった。今回は骨髄バンク議員連盟の事務局次長である自見はなこ参院議員にご参加いただき、ご挨拶もいただいた。プログラムの第一部は式典を実施した。第二部の講演では長野赤十字病院の植木俊充血液内科副部長にご登場いただいた。移植体験者と提供体験者も出演した。第三部のシンポジウムでは、木下ほうかさん(俳優)の骨髄バンクアンバサダー就任セレモニーを実施。その後「ドナー登録者数全国ワーストからの脱出作戦会議」というシンポジウムを行った。諏訪市長の金子ゆかり氏、長野朝日放送報道制作局長の郡司勝巳氏などが参加した。開催前に長野へ出向き地元メディアへ情報提供した。手元の新聞記事は、地元紙の事前報道である。また長野朝日放送で放送された番組がある。全国大会の前日9月20日の夕方に放送されたニュースと、後日に全国大会の様子を伝えたニュースを上映する。

#### 【長野朝日放送のニュースをDVD上映】

(主な意見)

- <浅野> 木下ほうか氏が「言うほどたいしたことなかった」とコメントしたように思うが「言うほど」とはどのような意味か。
- <小島> 「世間一般で言われているほど痛みがなかった」ということだと思われる。
- <浅野> 一般的には「(痛みがあつて)大変」と言われているということか。放送を観た人が(木下コメントを)どう受け取るか。皆さんそのように言っているのか。

- <小島> 「骨髄を提供するのは怖い」「登録するのは怖い」「痛いでしょう」といった誤解や、脊髄と骨髄を混同しているなど確かにある。
- <浅野> 「全然たいしたことなかった」とコメントしてもらえるとありがたい。
- <加藤> 前々回の業務執行会議で懸念がいくつかあったが、全国大会に実際に出席して、その懸念を超える現場での職員らの情熱や活動に改めて感動した。今後の全国大会を考えると、業務執行会議の中で十分に揉んで実行しないと「良かれと思ってしている」ことが誤解につながる可能性があると思う。以前、佐々木理事がいた頃には事前に全国大会準備委を設置していた。「なかなか上手くいかない」ということで現在の形になったが、事務局の負担が大きいと思う。橋本理事や大久保理事の力をお借りして準備していただきたい。次回の会場（県）を決めるプロセスは、早い段階からここで議論して皆で合意した上で動いてほしい。2か月前に内容を知らされて「こんなの…」と思った理事も多いと思う。そういうことがないようにしていただきたい。
- <小島> 前回の反省も含め、来年の大会及び2年後の30周年大会は準備委員会を設けて進めていきたい。
- <小寺> 結果的には大成功と思う。長野県がドナー登録者数全国最下位から脱出しつつあるということも良かった。
- <小島> 長野県は9月にも57名の登録があり順調に推移している。
- <大久保> 当日参加したが、ライオンズクラブから67名という来場者があった。多くのガバナーも来られて「今後も骨髄バンクを応援しなくちゃいけない」という力強い応援の言葉をいただいた。広報渉外部の長野県担当は（こうした熱意を）途絶えさせないように、継続して応援してもらえるようにしてほしい。
- <橋本> 長野のボランティアと（大会後に）連絡を取り合い、活気が続いていると伺っている。長野県の活動そのものにとってもよかった。大成功だと思う。ニュース映像を観て感じたことがある。「移植が成功して元気になった」「臍帯血をもらって元気になった」それ自体はすごく良いことである。また「移植の世界はこういうこともあって」という発言が偶然含まれていて良かったのだが、あたかも「残念ながら臍帯血だった」といった響きもあった。「いや、そうではなくて…」と思いながら観ていた。社会の理解が少し追い付いていないのかと少し引かかった。事前の準備・メディアへの説明も皆の協力でやっていけたらいいなと思う。

## （2）「ドナー休暇制度」導入推進活動（途中報告）

小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

「ドナー休暇制度」を478社が導入している（11月1日時点）。専任職員を配置した今年3月1日から132社増加している。増加要因としては当法人の発信（企業へのアプローチ）以外に、社会的関心も高まっている効果もあったと分析している。ドナー休暇に関する新聞記事を配布している。11月7日付毎日新聞に大きく報道されている。これは共同通信の配信記事なので、他の全国の地方紙（共同通信加盟社）にも順次掲載されると思われる。また日本経済新聞でも取り上げられている。

3月以降、383社に制度導入をアプローチした。そのうち導入済が132社。内訳は新規導入が43社、既導入89社（制度導入が判明した企業）である。新規導入企業の中には、既にあるボランティア休暇や積立休暇の使用目的の適用項目に（ドナー休暇を）追加適用した企業もある。そうした企業の担当者からは「制度を新設するより導入しやすい」という意見があった。また既導入89社の中で、公開可能な企業を当法人ホームページの一覧リストに掲載する。企業側としては今回の働きかけによって（自社にドナー休暇制度があることに）気付くこともあり、制度の再認識と従業員への周知へのきっかけとなればと考えている。

円グラフの【返答なし】は企業ホームページにメールしたり、代表電話へ連絡し「後日、担当者より連絡します」とあったが、その後の返答がないものである。【不明】は連絡・訪問して制度を説明した後に明確な回答がなく、導入するかしらないかも不明な企業である。次に、後向き回答を詳説する。「後向きな企業」の考え方は、今後の導入促進にとって貴重な情報になる。後向き回答は33社で、内訳は「有給休暇で対応」が23社、「育児休暇や介護休暇など他の特別休暇の取得を優先したい」が3社。「有給休暇で対応」の23社のうち10社は「有給休暇取得率の高い会社300」にランクインしている企業だった。あくまでも仮説だが、有給休暇の高取得率を維持するため「ドナー提供は有給休暇で」という傾向が考えられる。前述23社のうち、残り13社は「まずは有給休暇取得率のアップ」が先で、新たな特別休暇は「導入無し」ということが考えられる。

#### （主な意見）

<大久保> 後向きの33社は特定の業界なのか。流通業や小売業などは、導入が難しいのかもしれない。経団連などにもお願いしてもなかなか協力を得られないので、原因を分析してほしい。例えばチェーンストア協会等の会合で説明の時間をもらうなど、理解を促す施策を今後考えるとよいのではないか。現在、NPO法人フレンドシップをお伝いしている。その中に「全国ドナー休暇制度推進連絡協議会」がある。例えば（制度導入に向けた）セミナーを実施したり、情報冊子を作成して配布したり、月刊ダイヤモンドといったビジネス誌でドナー休暇導入企業を紹介するなど、様々な活動を今後実行していきたい。（骨髄バンクでは）担当者1名が全国を対象に説明や交渉を行っているので、できるだけ我々もバックアップしていきたいと考えている。協力してほしいことやできることがあれば申し出てほしい。

<小島> NPO法人フレンドシップには、以前からドナー休暇制度の導入推進に関して積極的に関わっていただきご協力いただいている。

<浅野> 最近、企業・団体へのアプローチを開始して、専任職員を配置しているということか。その専任職員の（実際の）感触を聞いてみたい。

<小島> 専任職員は本日は出席していない。企業アプローチのために地方へ出張している。

<浅野> 大変と思う。帰ってきて「大変だった、楽しかった」といった報告などはあるか。

<小島> （制度導入の窓口担当者に）アポイントメントをとって出向いて説明する。それが地方の場合もある。話は聞いてくれるが、対応する方（の役職や肩書）によって熱心度が違うと聞く。対応してくれるのが最初から部長クラスであると「熱心で良い感触」といったことがある。対応が一般職だと「無理かな」という感触となる。それが先ほどの【不明】や【返答なし】に繋がると聞いている。

<小寺> 専任職員1名で全国を走り回っているのか。

- <小島> そのとおりである。
- <小寺> それは大変だ。【返答なし】は会ってもらえなかったということか。
- <小島> 「後日、担当部署より連絡をします」と言われ、それっきりということである。
- <梶村> 自分は東京海上日動に勤務しており、グループ会社が20社ぐらいある。東京海上日動本体はドナー休暇を導入しているが、グループ各社までは把握していない。3月までは子会社で取締役をやっていた。その会社はまだ導入していないので、これを機会に導入を働きかけたい。
- <橋本> 企業のドナー休暇制度から少し離れるが、自治体による提供ドナーへの助成制度は調べているか。青森県で助成していて「これはいい」と思った。（地方では大企業がいっぱいある訳ではなく、農業従事者も多い。日本中に（自治体による助成制度が）結構あるのでは。
- <小島> 現在把握している範囲で全国587市区町村が助成制度を設けている（毎月のマンスリーで最新数字を報告）。制度を設けているのは市区町村だが、市区町村が制度を設けるにあたり都府県が予算の半分を補助するという仕組みが20を超えている。鳥取県では、提供ドナーと企業に対して県が直接補助する制度が全国で初めて始まったと聞いている。
- <大久保> 助成制度の導入自治体名は、骨髄バンクホームページに一覧リストの形で公開されている。
- <小寺> 色々なサポートが増えてきている。大変ありがたい。

#### (4) 調整医師の新規申請・承認の報告

吉川ドナーコーディネーター部TLが資料に基づき説明した。

令和元年10月11日から10月31日に新たに申請・承認された調整医師の人数は4名、合計で1138名である。

##### (主な意見)

- <小寺> 調整医師を降りられる人は特に報告はないのか。
- <吉川> 報告していない。
- <小寺> 合計数で大体見ていくということか。
- <吉川> そうである。
- <小寺> ここのところしばらく1000名強で横ばいか。
- <吉川> 調整医師は1100名程度で横ばい状態である。「海外留学に行く」といった理由で随時（辞退の）連絡をもらうが、やはり急に大きくなるのは年度替わりが多いと思う。

#### (5) 寄付報告

小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

令和元年度10月の寄付は件数542件、金額は522万3777円だった。ヤンセンファーマ社から80万円、荏原製作所から30万円の寄付があった。ヤンセン社は毎年寄付をいただいで

いる。荏原は日本水泳連盟のメインスポンサーであり、池江璃花子選手の白血病公表をきっかけに骨髄バンクを応援してくれている。今回の寄付のほか、社内でのドナー登録会実施、ドナー休暇制度も導入していただいた。平成 29 年度・平成 30 年度の同月と比べ今月は減少している。29・30 年度は個人からの大きな遺贈があったために差が出た。今年度 4 月～10 月の寄付件数は 5143 件、寄付金額は 6831 万 9853 円となった。

(主な意見)

<小寺> 寄付件数が上がってきているのはありがたい。

## (6) 移植件数報告

渡邊総務部長が資料に基づき説明した。

2019 年 10 月の移植件数は合計が 123 件、「国内から国内」121 件、「海外から国内」が 1 件、「国内から海外」が 1 件となっている。4～10 月の累計移植件数は「国内から国内」739 件、「海外から国内」が 3 件、「国内から海外」が 7 件。ほぼ予算どおりの進捗である。

以 上